

被災者支援における災害ボランティアの終わりに関する現場研究

林 稜

本研究は、平成 28 年熊本地震の震源地となった益城町でのフィールドワークを通じ、災害ボランティアと被災者と関係を調査し、被災者にとっての災害ボランティアの終わりを明らかにするものである。

まず、災害ボランティアに関する研究を概観し、これまで行われてきた災害ボランティアの研究は主に災害ボランティアの観点で研究されたものであり、被災者の観点を欠いていること、さらに災害ボランティアの活動の終わりに関する研究が少ないことも指摘した。それらを受けて、本研究では、被災者にとって災害ボランティアの終わりはいかなるものであるかを、災害支援に関係して論じられる 3 つの観点から注目した。まず 1 つ目はニーズである。被災者のニーズを満たすことが災害支援の大きな目的ともなっており、災害支援に密接にかかわる概念である。2 つ目に、環境である。災害支援は時間経過とともにその規模が縮小していく。それは災害支援を取り巻く環境の変化に大きく関係していると言える。しかしその変化は複雑で動的であり、本研究では、そうした変化していく環境をとらえるためにグループ・ダイナミックスの視座に立つ。3 つ目に寄り添いである。災害支援の現場において、支援の継続性や心のケアの点や、災害支援の専門性に対する形で寄り添いという言葉が頻繁に用いられる。本研究では寄り添いの概念を看護学に求め、その中でも特に看護師に専門性を否定し、人間同士として患者と接するように論じたトラベルビーを参照する。トラベルビーの理論から、専門職としての寄り添いと社会的関係としての寄り添いの 2 つを設定した。以上、ニーズ、環境、寄り添いの 3 つの視点のもとで被災者支援における災害ボランティアの終わりに注目した。

本研究は、フィールドワークに基づくエスノグラフィーと、フィールドワークで得られた知見をもとにしたインタビュー調査の 2 つの方法を用いた。フィールドワークは、平成 28 年熊本地震の震源地とされる熊本県上益城郡益城町で行い、避難所となった益城町総合体育館の附属施設であるよかましきハウスや、安永仮設住宅、馬水東道住宅でフィールドワークを行った。

エスノグラフィー、インタビュー調査の結果から、被災者にとっての災害ボランティアの終わりをニーズ、環境、寄り添いのそれぞれの観点からそれぞれ明らかにした。ニーズに関しての災害ボランティアの終わりは、被災者のニーズの充足ではなく、災害ボランティアのニーズが充足することであった。また、環境に関しての災害ボランティアの終わりは、グループ・ダイナミックスの集合流という概念を用い、「災害支援の集合流」から、震災以前から続く被災者の「日常生活の集合流」に入り、災害ボランティアとして振る舞うことをやめることであることを指摘した。そして寄り添いに関する災害ボランティアの終わりは、そもそも専門職としての寄り添いを実践できている例が確認できず、またその実践自体が平成 28 年熊本地震のような大災害では困難であると考えられた。一方で、社会的関係の寄り添いは数が少ないものの確認でき、その終わりは人間関係の終わりであると考えられた。また、ニーズ、環境の観点から災害ボランティアを終えることによって、初めて寄り添いが行えることが示唆された。その寄り添いの実践によって、災害ボランティア-被災者の権力関係から個人対個人の 1 対 1 の対等な関係を構築することができ、支援活動が促進されることもまた示唆された。(ボランティア行動学)